

論 文

**帆掛けサバニの現代的な意義に関する事例研究
—サバニ帆漕レース参加者に対する調査の質的分析—
A case study of the contemporary significance of traditional wooden
sailing boats known as Hokake Sabani:
Qualitative analysis of a survey of Sabani Sailing and Paddling Race
participants**

千足 耕一*・蓬郷 尚代**
Koichi CHIASHI and Hisayo TOMAGO

要旨：本研究では、帆掛けサバニの現代的な意義について事例的に考察することを目的として、サバニ帆漕レースの参加経験者を対象に、サバニ帆漕レースや帆掛けサバニへの取り組みが参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響について尋ねるweb調査を実施した。得られたテクストデータについて、在住地域（レースが実施される座間味島、沖縄県内、沖縄県外）により分類し、SCATを用いて質的に分析した。全ての地域に共通して、【人との繋がりの拡大】、【レースへの挑戦がもたらす心理的効果】、【継続による波及効果】が記述された。座間味島では、【島での熱心な取り組み】と【座間味島の中学生への影響】が特筆できる。沖縄県内在住者は、【レース開催による認知度の高まり】、【レース運営者への感謝】、【日常行動への繋がり】に加え、【他地域への波及効果】や【レース以外の活用の可能性】が記述された。沖縄県外在住者においては、【沖縄についての理解の拡大】や、サバニの【伝統を継承したい】といった【個人の思いへの影響】、【サバニに取り組むことへの感謝】が表現され、サバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】と記述された。以上のように示された分析結果から、伝統的海洋文化財である帆掛けサバニの現代的な意義を認めることができる。

キーワード：帆掛けサバニ、伝統的海洋文化、現代的意義、事例研究、質的分析

1. 研究の目的

“サバニ”とは、沖縄地方で用いられる民族的な小船と示され、漁撈や移動に用いられてきたものである。2006年に開催された「サバニの伝統と未来」と題されたシンポジウムの記録においては、当時の沖縄本島で423隻のサバニをカウントできたが、シンプルな無動刃のサバニは21隻であり、そのうち使用に耐える状態のサバニは12隻しかなく、サバニに関する伝統的な技術や信仰について調査記録すべきであると述べられている¹⁾。これまでのサバニに関する研究は、歴史学的研

究²⁾³⁾、船体に関する工学的研究⁴⁾⁵⁾、民俗史的研究⁶⁾などがあり、板井(2014)は、工学的研究と歴史や民族に関する研究との連携が不足していることを指摘している⁷⁾。

サバニの船型は、安定性よりもスピードを重視したものとなっており、船の長さと幅の比率が、通常のヨットが3対1であるのに対してサバニは6対1であり、より細長く丸木舟のように丸みのある流麗な線で構成され、船首波と船尾波による造波抵抗を低下させている。また、船尾部分は通常の舟よりもせり上がってお

* 正会員 東京海洋大学 学術研究院, ** 正会員 東京海洋大学 海洋生命科学部

り、追い風の際に波をかぶらないように設計してある。三角形の船尾板は強い傾斜で後ろに傾いており、転覆した時には逆に不安定になり、復元しやすい⁸⁾という特徴を備えている。このような構造を持つサバニは時代の変化に伴い、複材化、大型化、準構造船化と変化してきた。この変化に対して板井(2005)は漁法や「船のあるべき姿」という文化、そしてその漁法を支えている社会というサバニを取り巻く環境的要因が変化し、あるいは保持されるのに伴ってサバニはさらに大型化し、動力化してFRP化され、特殊な船型の船が建造されるようになったのであり、かつ従来通り無動力船も少數ながら継続して建造され、運用方法その他の変化にもかかわらず常にサバニはその「あるべき姿」を保持しようとしてきた⁹⁾と述べている。

サバニ帆漕レースは、2000年の九州・沖縄サミットを記念して開催された。当該レースは、「古来より受け継がれてきたサバニによる操船技術の復活、帆走の再現を目指し、次の世代へと伝えていく」という思いを具現化しようとしたものであり¹⁰⁾、サバニの伝統を復興させる海洋文化復興運動の一つとして位置づけられる。2019年時点で20回継続して開催されているスポーツイベントでもあり、毎年梅雨明けの6月末から7月初めに、沖縄県の慶良間諸島の一つである座間味島の古座間味ビーチから那覇港までの約20海里(約36km)を渡るレースである。また、大会名にある「帆漕」という言葉は、帆走(船に帆を張り風の力で走ること)の「走」を「漕」に変えた、この大会から生まれた造語であると述べられており、帆を操りながらエークを使って船を漕ぐという、古来より伝わるサバニ操船技術の再現・継承への想いが込められている¹¹⁾と記載されている。

サバニ帆漕レースに出場するサバニにはアウトリガ一付きのもの(ニーサギ)とアウトリガーがついていない伝統的な単胴の古式サバニにクラス分けがされているが、当初はこれらの区別がなく大会が運営されていた。このような大会運営に対して厳しい意見が寄せられることもあったが、第6回大会に関する記事における元サバニ帆漕レース競技委員長の発言では、「このレースは沖縄伝統の船、サバニという船ができるだけ多くの人たちに体験してもらい次の世代に引き継ぐこと、またレースに参加することによって、海で活動すること、また生き残るためにどうすれば良いかを身をもって知る機会にしたいという趣旨。だから、できるだけ多くの人に参加してもらうことも重要で、平等な条件で競い合うことにこだわり、規則を厳しくする

と参加者は激減し、それではレース開催の主旨が失われてしまう」と記載されている¹²⁾。

エンジンの普及によって木造の帆掛けサバニの造船並びに帆走技術は途絶えそうな状況となり、木造船の衰退とともに船大工の廃業が進み、現在サバニを造ることができるのはわずか数名であるが¹⁰⁾、サバニ帆漕レースをきっかけにして造船が復活し、2000年からの16年間で40艇を超える木造のサバニが生まれた¹³⁾ことが記述されている。

このように、サバニ帆漕レースの誕生と継続によって、帆掛けサバニを取り巻く環境に様々な影響が及ぼされたことがうかがえる。栗本・荒木らは、「海人丸Expedition2005帆漕航海」と称し、サバニを用いて沖縄から愛知までの約2000kmを航海し、サバニを愛・地球博の会場に展示したことが報告されている¹⁴⁾。また、サバニ帆漕レースにも参加している森らが南西諸島を帆掛けサバニで巡る旅を実施したドキュメンタリーに関する出版も行われている¹⁵⁾。この他、エンジン付きのサバニではあるが、石垣島においてサバニクルーズとして文化の振興並びに漁業への活用も行われている¹⁶⁾。サバニクルーズは、漁業の一つとして石垣島の漁業者が2000年から始めた活動で、個人でできる資源管理として「魚を獲らない漁業(観光ツアーリング)」の導入を計画したものである。既存の漁船や漁業資材を利用したウミンチュー(漁業者)らしい仕事として、サバニ・漁法やサンゴ礁の海を体験し、知ってもらうことにも意義を持っている¹⁷⁾と記述されている。

以上のように、サバニ帆漕レースの開催を契機に、漁業者の使用していた舟艇が、漁業の道具や、海洋スポーツ・レクリエーションの道具としての位置づけを拡大させるなど、帆掛けサバニやサバニを取り巻く状況は変化し続けている一方、帆掛けサバニの現代的な意義に関する調査は実施されていない。山田(2015)は、「スポーツを通して行われる地域社会づくりの取り組みは、スポーツによる地域開発の重要な実践のひとつに位置づけられる」との視座から伝統的運動文化の一つとして衆多の打毬戯を取り上げ、地域における文化的価値及び意義を明らかにするための研究に取り組み、伝統的運動文化の新たな価値としての、地域開発における意義について考察し、このような研究成果の蓄積の必要性に言及している¹⁸⁾。本研究は、伝統的な海洋文化財の地域開発における研究成果の蓄積にも資することが可能である。そこで、本研究では帆掛けサバニを取り上げ、地域における文化的な価値や意義を明らかにするために、帆掛けサバニに取り組む者とし

てサバニ帆漕レースの参加経験者を選択し、サバニ帆漕レースや帆掛けサバニへの取り組みが参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響について尋ねた調査結果の分析を通して、帆掛けサバニの現代的な意義について事例的に考察することを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査方法

2.1.1. 調査対象

調査対象は、サバニ帆漕レースに参加経験のあるサバニ愛好者とした。

2.1.2. 調査実施時期および方法

調査は、2019年11月～12月に、インターネット上にGoogle Formを用いたweb調査票を設置する形でアンケート調査を行った。回答の依頼は、機縁法を主な方法とし、SNSでの情報公開やメール等での依頼によりアンケートフォームのURLが周知された。

2.1.3. 調査の倫理的配慮

調査に際しては、回答(記入)前に、研究の趣旨や倫理的配慮、および研究参加についてのページを設定し確認できるよう、アンケート回答ページの先頭に記載した。

2.1.4. 調査項目と分析対象項目

web調査では、在住地域、性別、年齢等の属性に加えて、サバニ帆漕レースへの満足度等も併せて尋ねたが、本研究では、帆掛けサバニの現代的な意義について考察することを目的とすることから、設問「サバニ帆漕レースやサバニへの取り組みが、皆さん自身やチーム・地域社会に与えた影響について、自由に記述してください」に対する回答(テキストデータ)を分析対象とした。

2. 分析方法

2.2.1. 構成概念とストーリーラインの生成

本研究では、分析対象者数が38件と比較的少人数であることから、多くのサンプルを集めて定量的に分析する量的な分析ではなく、回答者一人ひとりのストーリーや記述に着目して分析する質的な分析方法を採用することとし、大谷¹⁹⁾の質的データ分析手法であるSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いることとした。この分析手法は、アンケートの自由記述欄などの比較的小さな質的データの分析にも有効であると示されており¹⁹⁾、本研究ではweb調査の自由記述欄の記述を分析することからも適切であると判断した。

SCATは言語データをセグメント化し、そのそれぞれ

に、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言い換えるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリーラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である。

質問紙調査の自由記述から得たテキストデータについて、分析作業において分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには、SCATの4つのステップとストーリーラインおよび理論を記入した。

SCATを行うにあたり、回答者における在住地域により対象の見方や捉え方が異なることが考えられることから、サバニ帆漕レースの開催地である座間味島在住者、座間味島以外の沖縄県内在住者、沖縄県外在住者の3つに分けて分析を行うこととした。

3. 結果

web調査における本研究の分析対象となる設問への回答者は38名であった。本研究の対象者における属性を表-1に示した。

分析においては、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言い換えるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念を順に記載していったが、表-2から表-4においては、テキストデータ、言い換えおよびテーマ・構成概念のみを記載して示した。以下の文中の「」はテキストデータ、<>は言い換え、【】は概念を指す。

3.1. 座間味島在住者の回答者における自由記述から

座間味島在住の5名の自由記述からは、サバニ帆漕レースの開催地である島民の意見として「サバニでたくさんの人と楽しさを共有できる」「座間味島の人やサバニレースに関わる人との交流ができる」「交流が増えた」といった<楽しさ>の<共有>が示され、【人のつながりの拡大】が生じるとともに、このことが<地域貢献>につながると述べられている。

このほか座間味島においては、地元中学生がチーム

表-1 対象者属性

居住地域	人数	性別		年齢(歳)					
		男性	女性	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69
座間味島	5	3	2	0	2	0	3	0	0
座間味島以外の沖縄県	16	11	5	1	1	2	4	7	1
沖縄県外	17	14	3	1	2	4	4	6	0
									n=38

“海学校”を編成し学校行事の一つとしてサバニ帆漕レースに継続的に参加しているが、「中学生になってからやりたい事の一番に入っており、卒業式においても感慨深い思い出の一つに必ず入っている」と記述されている。家族がそれぞれに別のチームで参加するなどみんなで参加>する、【島での熱心な取り組み】が認められ、<地域に根付いた行事>となっている。

そして「座間味村が地道につづけてきたレースが今は沖縄県全体に広がりサバニを楽しむ人が増え、サバニが伝統だと大切に思う人が増えている」と【座間味

島が続けたことによる波及効果】があることが示された。

3.2. 沖縄県内在住者の回答者における自由記述から

沖縄県在住の16名から得られた回答からは、帆掛けサバニそのものが「よく被写体とされる」ような【美しさ】を持つこと、何よりも【楽しい】ことが、帆掛けサバニへの取り組みを継続させる意欲に繋がっていることが記述された。「新しい楽しみと新しい仲間ができるま

表-2 抽出された概念と代表的なテキストデータ（座間味島在住者）

【座間味島在住者】			
回答	グループ化した言い方	概念	
サバニでたくさんの人と楽しさを共有できる事が地域貢献だと思う。 (20代男性、出場5回)	<一緒に楽しむ>	楽しさを共有できることで地域がつながる	
レース完走で達成感を得られる。 座間味島の人やサバニーレースに関わる人との交流ができる。(20代男性、出場5回)	成功体験、 交友関係の広がり	レースによる自己意識への影響、 レースの影響による【人とのつながりの拡大】	
座間味島が地道につづけてきたレースが今は沖縄県全に広がりサバニを楽しむ人が増え、サバニが伝統だと大切に思う人が増えている事がうれしい。(40代女性、出場5回)	継続の成果、伝統文化の認 識、喜び	【座間味島が続けたことによる波及効果】、伝統文化の継承	
父は伴走組、母はうみないび、子は海学校とみんなそれぞれのチームで参加し、体験を共有できた。(40代女性、出場3回)	<家族で取り組む>	【島での熱心な取り組み】	
座間味では幼い頃からレースを目の当たりにしており中学生になってからやりたい事の一番に入っており、卒業式においても感慨深い思い出の一つに必ず入っている事。 (40代男性、出場16回)	<地域に根付いた行事>	【座間味島の中学生への影響】	
座間味村がレースを継続開催してきた成果として、座間味島だけでなく県外からの参加者も増え、交友関係が広がり、楽しさを共有できるよ ストーリーライン うになった。 座間味島を挙げてのイベントとなり、熱心な取り組みがされている。			
洋詩的記述	・島に根付いた行事であり、伝統文化の認識や継承に繋がっている。 ・島民以外の人を受け入れる姿勢がある。		

表-3 抽出された概念と代表的なテキストデータ（座間味島以外の沖縄県在住者）

【座間味島以外の沖縄県在住者】			
回答	グループ化した言い方	概念	
新しい楽しみと新しい仲間ができました。 次参加できる大会も楽しみです。(20代女性、出場2回)	親交、交流の広がり	参加者にとっての【楽しめ】となって いる	
糸満市内小中学生対象の教育プログラムがスタートした。 20年継続したレースの貢献度が高いと思う。(50代男性、出場3回)	他地域への波及	継続による波及効果	
糸満市に関わっています。現在地域の小学校、中学校、沖縄水産高専と授業の一環として地域文化に海洋教育として教育行政も目を向けてくれるようになりました。 レースは予算に危険リスクが大きいなどあるがレース以外の伸びしろはあるのではないかと思う。(50代男性、出場15回)	他地域への波及、 課題	レースの成果、 さらなる【活用の可能性】	
練習中（遊び中）に目に留めた方々から写真の被写体によくされる。(注目度は高い) (40代男性、出場8回)	絆になる、目立つ	【楽しさ】	
個人ではただ単に楽しいからやっている。伝統の継承という意味で考えると、「楽しさ」というのは非常に大切なかもしれない。 伝統を守るという心でやっている人は、サバニだけに限らずいろいろな伝統行事にも興味があるのでは？ そういう方たちが地域で伝統芸術の役割を担う活躍をしていると思う。(40代男性、出場2回)	面白い	楽しいから、継承される	
チームワークの大切さ、が良く分かりました、サバニの素晴らしさをもっともっと知っ てもいい。 大会関係者に感謝です。(50代女性、出場3回)	舟に乗ることによる理解、 情報発信	レースをきっかけにしたサバニの理 解、【レース運営者への感謝】	
島でも小さいながらサバニのレースをしています。子供達も舟船出来たり、お母さん達 もやってみたいといってくれる人も増えました。 自然を感じる楽しさが伝わってきてると思います。(40代女性、出場1回)	参加者の拡大、 自然を感じる	離島の自然を再認識できる	
チームワーク、サバニの素晴らしい、琉球の事、海の事全般に興味が出てくる事。 (50代男性、出場3回)	体験による理解の深化、興 味の拡大	サバニに取り組むことによる【人間関 係への影響】、知的な意欲の亢進	
ストーリーライン	レースが20年間継続されたことによる認知度の高まりが認められ、盛況も含めサバニが身近なものになりつつある。		
理論的記述	・現役のサバニ船大工がいる糸満市が1つの拠点となっており、伝統文化継承の意欲が高い。 ・海とサバニが身近にあり、活用されやすい環境であることから、レース以外の活用の仕方にも目が向けられている。 ・サバニの素晴らしいと楽しさを伝えようとする意欲が認められる。		

した」や「サバニの素晴らしいところをもっともっと知つてもらいたい」、「文化を継承しようというモチベーションに繋がっている」など【人間関係への影響】【興味の拡大】や【継続意欲】が生じている。

「サバニのことを知つてもらえた」のような【レース開催による認知度の高まり】と、「20年継続したレースの貢献度が高い」といった【レース運営者への感謝】及び、レース開催による【集客効果】についても記述されている。

帆掛けサバニを用いて「非動力による島渡り」を行うことによって【実践から得られる誇り】を持つことに繋がっており、サバニへの取り組みにより「サバニとサバニの修理整備が身近なもの」となる【日常行動への繋がり】が生じている。

この他、「島でも小さいながらサバニのレースをしています」や「糸満市内小中学生対象の教育プログラムがスタートした」「地域の小学校、中学校、沖縄水産高校と授業の一環として地域文化に海洋教育として教育行政も目を向けてくれるようになりました」など【他地域への波及効果】が認められることや、「沖縄の伝統サバニを乗りこなす塾をやっている」など【レース以外の活用の可能性】にも目を向けている状況が認められた。

3.3. 沖縄県外在住の回答者における自由記述から

沖縄県外在住者 17 名の回答からは、レース参加をきっかけとしたサバニへの取り組みにおいて、【他地域の人が沖縄人と交流する】、【他地域の人が沖縄の文化に触れる】ことによって【沖縄や座間味島への興味が拡大】し、【沖縄についての理解の拡大】につながっていることが推察された。また、レースやサバニへの取り組みを通じて、帆掛けサバニは「日本の伝統文化として残すべき舟」、帆掛けサバニを「大切に乗り続けていきたい」と記述し、帆掛けサバニの【伝統を継承したい】との思いを抱いていることが把握できた。

「サバニレースを目標として、1 年間の練習や手入れ等の計画を立てている」、「サバニに乗れない期間もサバニのことを考え影響を受け」といった記述に見られるようなサバニに関する【中心性の高まり】【個人の思いへの影響】が見られることや、「サバニレースやサバニに取り組む中で、新たな人間関係を構築することができた」、「レース運営の方々や島の方、参加者の方など多くの人たちと繋がりを持つことができたことは、県外から参加する私たちにとっては大きな財産となっています」との記述にみられる【交流の拡大】や【人間

表-4 抽出された概念と代表的なテクストデータ（沖縄県外在住者）

【沖縄県外在住者】	国語	グループ化した言い方	概念
沖縄という土地と文化を知ること、人を知ることはとても大きな影響を受けました。 (50代女性、出場5回)		地域資源、理解	【他地域の人間が沖縄の文化に触れる】、【他地域の人間が沖縄の人と交流する】
サバニレースを目標として、1年間の練習や手入れ等の計画を立てているといったように、1年間における年中行事となっている。小舟で海嶺を渡るといった、挑戦的な要素が在るため、技術を向上させたり、道具に工夫したりといったように、常に小さな目標設定ができるようになった。サバニの先駆者たちに、色々な話を聞くことができるというように、新たな人脈ができた。船を手に入れる過程で、沖縄の方々に大変お世話になってしまった。サバニレースやサバニに取り組む中で、新たな人間関係を構築することができた。サバニで海峡を渡りきることによって、自信が生まれるとともに、誇らしさを身に付けることができた。(50代男性、出場10回)	レース以外にも時間を費やす、人間関係の構築、精神的な影響	【中心性の高まり】、サバニレースに向けた計画的な活動、【交流の拡大】、【沖縄についての理解の拡大】、より深く【海を理解する】	
サバニを介した繋がりが人及び地域に与えた影響は大きく多様なので筆舌できないほどです。自身の人生もサバニと出逢った事により豊かになり人生の友と言つても過言ではありません。(50代男性、出場10回)	社会・個人への影響、人間関係の広がり	大きく多様な影響、【人生に豊かさをもたらす】	
日本の伝統文化として残すべき舟だと思うので、地域でも多くの人たちに乗って頂けるように様々な海のイベントに参加している。 そう言う意味も込めて、大切に乗り続けていきたい。レースに勝つとかそう言うことよりも乗り継けて行きたい。(50代女性、出場7回)	重要なもの、挑げろ	【伝統を継承する】ために行動	
新しい海の遊び、チャレンジの一つとして経験したこと、人としての成長につながっているかなと感じます。(30代男性、出場8回)	挑戦、<人間的成长>	【レースへの挑戦かもたらす心理的な効果】	
世代間交流が活性になった。明確な目標が共有された。今後の教育や観光産業への期待が膨らんだ。楽しいイベントが一つ増えた。(40代男性、出場3回)	繋がりの強化、目標を持つことの効果、期待	レースをきっかけとした【交流の拡大】・教育への期待、産業への期待の高まり	
ストーリーライン	・レースを通して、沖縄の文化に触れて、沖縄の人との交流が広がったことで影響を受け、人生が豊かになった。 ・サバニレースが1年間のメインイベントとなり、それに向けて整備や練習などの計画を立てている。 ・レースの順位や勝敗よりも、サバニは日本の伝統文化として残していくために乗り継いでいく。 ・レースに挑戦したことが、人間としての成長に繋がった。		
理論的記述	・リバニは沖縄文化の1つであるが、それを知り理解することで他地域の参加者がその影響を多人に受け、肯定的に評価している。 ・サバニレースに対する熱い思いが強い。		

関係の拡大】、「海を知るという事に対してより深い好奇心を湧かせて抱かせてくれた」といった【海の理解】に影響していることが示された。

レースに参加し完漕することによって、「きついことでも乗り越える力がついた」、「チャレンジの一つとして経験したことで、人としての成長につながっている」、「サバニで海峡を渡りきることによって、自信が生まれるとともに、謙虚さを身に付けることができた」のような【レースへの挑戦がもたらす心理的効果】を得てく人間的な成長>が期待できる点や、「サバニを介绍了繋がりが人及び地域に与えた影響は大きく多様」であること、「人と人との結びつきが強くなったと感じた」や「世代間交流が活発になった」などの【人間関係への影響】も認められた。

さらには、「何にも代えがたい貴重な体験をさせていただけていることに感謝」や「素晴らしい大会に参加させていただける事に感謝」のように【サバニに取り組めることへの感謝】が表現され、「自身の人生もサバニと出逢った事により豊かになり」、「影響は大きく多様なので筆舌に尽くしがたい」と記述され、帆掛けサバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】ことが考えられた。

参加者の行動レベルへの影響としては、【サバニ帆漕レースに向けた計画的活動】や【身体づくりのモチベーション】および【地元での他の活動】に影響を及ぼしていることが推察された。また、特に神奈川県葉山町には、宮古島から運んだサバニが存在し、「地域社会に対しても、サバニを知ってもらう機会ができ、さらには、葉山にはサバニがあるという事を葉山らしさの一つとして認識してもらえるようになつた」と沖縄県以外の場所でサバニに対する認知度を高めるきっかけともなっている。この他の構成概念には、島の人間以外の意見ではあるが【島の知名度】、【島民の誇り】、【島の経済への影響】があげられた。

4. 考察

本研究は、帆掛けサバニの現代的な意義について事例的に考察することを目的として、サバニ帆漕レースの参加経験者を対象に、サバニ帆漕レースや帆掛けサバニへの取り組みが参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響について尋ねる web 調査を実施した。得られたテクストデータについて SCAT により分析した。レースが実施される座間味島の在住者、沖縄県内在住者、沖縄県外在住者のように在住地域によって分類して分析ワークシートを作成した。

全ての地域に共通して記述されていたのは、帆掛けサバニに取り組むことによる<楽しさ>の<共有>、【人との繋がりの拡大】、小さな船に同乗して「きついことを乗り越える」共通体験をすることや、「漕ぎきる」ことによって得られる<喜び>が共有される点、<人間の力>を知り、<人間的な成長>や<達成感><自信の獲得>などの【レースへの挑戦がもたらす心理的効果】が認められる点、<継続の成果>が他の地域での活動に影響を与えるといった【継続による波及効果】である。サバニ帆漕レースに出場するためには、チームでサバニを準備し、練習を積み重ねることとなるが、小さな船に同乗して「きついことを乗り越える」共通体験をすることや、慶良間海峡を「漕ぎきる」ことによって得られる<喜び>が共有されるものと考えられる。

座間味島在住の参加者のデータにおいては【島での熱心な取り組み】が示された。実際に、第 20 回大会の参加チームをカウントすると、座間味村内から 9 艇(全参加艇数 36 艇中)で全体の 25% を占めていた。また、【座間味島の中学生への影響】に示される、中学生による“海学校”的取り組みが、村内に影響を及ぼしていると考えられる。地域における伝統的運動文化に関連した先行研究では、伝統的運動文化である桑名の打毬戯についての論考において「地域の伝統的文化が、地域の人々の協力のもとに、その地域の歴史と文化への理解を深める教材として伝承され実践されることを通して、地域と学校との連携が強化されるとともに、地域の人々のアイデンティティがより強固なものとなり、それが地域の活性化に繋がっている」¹⁹⁾と述べられており、また、因幡の菖蒲綱引きに関する論考において「子どもたちを中心に地域が一体となって取り組むことによって、連帯意識の高揚・強化と世代間交流による活性化など、地域の持続的、内発的発展に寄与するという機能を有している」²⁰⁾と述べられているが、座間味島における地域住民と中学生による“海学校”への取り組み事例も地域と学校との連携、地域のアイデンティティの高まり、連帯意識の高揚、世代間交流の活性化といった意義や機能を示すことが出来ると考えられた。第 20 回を迎えたサバニ帆漕レースには、“海学校”的卒業生から構成される“元海学校”チームがレースに参加するようになってきている事実がこれらの考察を強化するものである。また、座間味村は座間味島にサバニを保管しておくための艇庫(海洋体験施設)を 2005 年に建設し、村をあげてサバニ帆漕レースを継続するための努力を行ってきてている。このことも【座間味島が続けたことによる波及効果】につながる要因と

なったことが考えられる。

座間味島以外の沖縄県内在住者の回答からは、【レース開催による認知度の高まり】と、「20年継続したレースの貢献度が高い」といった【レース運営者への感謝】に関する記述、「サバニとサバニの修理整備が身近なもの」となる【日常行動への繋がり】に関する記述に加えて、「地域の小学校、中学校、沖縄水産高校と授業の一環として地域文化に海洋教育として教育行政も目を向けてくれるようになりました」など【他地域への波及効果】や、「沖縄の伝統サバニを乗りこなす塾をやっている」など【レース以外の活用の可能性】が記述されていることが特徴である。沖縄県内では八重山地域や糸満市に波及効果が高いことがうかがえる。実際に、糸満では船大工自身がレースに出場し、サバニを作り続けている事実があり、弟子への造船技術の伝承が認められている。また、糸満はサバニの保管場所として的一大拠点ともなっており、複数のチームがサバニを置き、練習や行事を行うなど、活動がますます盛んになってきている。また、2015年には糸満帆掛けサバニ振興会が立ち上げられ、様々な勉強会を企画したり、糸満市の教育活動の受け皿となったり、2019年にはサバニで糸満から久米島までを帆漕したりするなど、その実践を拡大させている。

沖縄県外在住者においては、【他地域の人が沖縄県人と交流する】、【他地域の人が沖縄の文化に触れる】ことにより【沖縄についての理解の拡大】につながっていることが示唆された。また、サバニの【伝統を継承したい】といった思いをはじめとした【個人の思いへの影響】が、他の地域の対象者よりも多く記述されるとともに、【サバニに取り組めることへの感謝】が表現され、サバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】ことが述べられた。

以上のように、本事例研究の結果からは、経済的な影響や知名度の向上などにも言及があったが、【人との繋がりの拡大】において最も大きな影響を与えることが推察された。座間味島がその場となり【継続による波及効果】が生じ、帆掛けサバニに乗る行動や帆掛けサバニを活用することによって、帆漕技術が復興・伝承されることにも繋がっている。

多くの木造船は、博物館で展示されるものとなっている今日、帆掛けサバニという伝統的な海洋文化財を、地域の自然や歴史を背景とした地域づくりに有用な資源として活用している事例として位置づけることが可能であり、取り組む人々やコミュニティに様々な影響を及ぼしていることが示された。また、帆掛けサバニ

が活用されることによって造船技術や操船技術の伝承などが示されるなどの現代的な意義を認めることが出来ると考えられた。伝統的な身体運動文化に関する先行研究では、薩摩のハマ投げについて「日本の伝統的な身体運動文化を再認識し、それを現代において継承していくことの意義と課題を考察するうえでの手掛かりとなる事例」²¹⁾として示しているが、本事例は、舟艇の操船技術を継承することの意義を再考する事例としても位置づけられると考えられた。

5. 結論

本研究は、帆掛けサバニの現代的な意義について事例的に考察することを目的として、サバニ帆漕レースの参加経験者を対象に、サバニ帆漕レースや帆掛けサバニへの取り組みが参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響について尋ねるweb調査を実施した。得られたテキストデータについて、在住地域（レースが実施される座間味島、沖縄県内、沖縄県外）により分類し、SCATを用いて質的に分析した。

全ての地域からの回答に共通して記述されていたのは、【人との繋がりの拡大】、【レースへの挑戦がもたらす心理的効果】、【継続による波及効果】である。座間味島在住の参加者のデータにおいては、【島での熱心な取り組み】と【座間味島の中学生への影響】が特筆できる。沖縄県内在住者からは、【レース開催による認知度の高まり】、【レース運営者への感謝】、【日常行動への繋がり】に加えて、【他地域への波及効果】や【レース以外の活用の可能性】が記述された。沖縄県外在住者においては、【沖縄についての理解の拡大】や、他の地域在住の対象者よりも、サバニの【伝統を継承したい】といった思いをはじめとした【個人の思いへの影響】、【サバニに取り組めることへの感謝】が表現され、サバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】と記述された。

本研究で示されたサバニ帆漕レースの開催と継続を契機とした帆掛けサバニへの取り組み事例から、取り組む者や居住地域への様々な影響について考察することが可能であった。帆掛けサバニという伝統的な海洋文化財を、地域の自然や歴史を背景とした地域づくりに有用な資源として活用している事例として位置づけることが可能であり、取り組む人々やコミュニティに様々な影響を及ぼしていることが示された。また、帆掛けサバニが活用されることによって造船技術や操船技術の伝承などが示されるなどの現代的な意義を認めることが出来ると考えられた。

謝辞

本研究はJSPS科学研究費18K10922の助成を受けたものです。

引用・参考文献

- 1) 質疑応答(特集シンポジウムサバニの伝統と未来), 沖縄民族研究, 24, pp.35-42, 2006.
- 2) 豊見山和行:船と琉球史ー近世の琉球船をめぐる諸相一周縁の文化交渉学シリーズ5, pp.23-35, 2012.
- 3) 黄當時:古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について, 佛教大学文学部論集, 第97号, pp.1-20, 2013.
- 4) マセンギアレックス・高山久明・西田英明・林田滋:沖縄サバニの船型と船体抵抗について, 日本航海学会論文集, 83(0), pp.213-220, 1990.
- 5) マセンギアレックス・藤田伸二・西ノ首英之:小型漁船の耐航性に関する研究I:「サバニ」の船型及び復原力特性, 日本航海学会論文集, 86(0), pp.199-204, 1992.
- 6) 板井英伸:フィールドから見えるものー近世沖縄の舟艇の消滅・変化・継承の動態ー, 周縁の文化交渉学シリーズ5, pp.49-60, 2012.
- 7) 板井英伸:境界の変遷ートカラ・奄美・沖縄における丸木舟の変化ー, 国際常民文化研究叢書5ー環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究ー, pp.59-83, 2014.
- 8) 白石勝彦:サバニ(第3版), 株式会社海想, 2010.
- 9) 板井英伸:沖縄の準構造船・サバニーその登場から代替・消滅・継承までー, 民具研究, 131, pp.27-44, 2005.
- 10) 沖縄県座間味村 サバニ帆走レース実行委員会:事例紹介『サバニ帆漕レース』が生み出したもの(特集スポーツと地域振興), 人と国土21, 國土計画協会, 39(4), pp.43-46, 2013.
- 11) サバニ帆漕レース公式ホームページ,
https://www.photowave.jp/sabani_s/, (閲覧日:2020年5月19日)
- 12) 三宅啓一:こういうレースもありだよね 第6回帆漕サバニレース, ラメール, 日本海事広報協会, 30(6), pp.78-81, 2005.
- 13) 荒城康弘・宮城公子:サバニ大工 木を接ぐように人と人を繋げていくサバニ, 森の“書き書き甲子園”書き書き作品集, 8, pp.480-486, 2009.
- 14) 栗本宣和・吉田卓:「生きる力」を伝承するためのプロモーション方法とその効果ーサバニ・プロジェクトを通して, 日本スポーツ方法学会第20回大会号, pp.47, 2009.
- 15) 村山嘉昭:サバニ 旅する舟, 海想, 2016.
- 16) 関いづみ:地域システムを支える漁業の可能性ー「獲る漁業」から「見せる漁業」, サバニクルーズが目指すもの(特集エコツーリズム必要論&慎重論)しま, 51(2), pp.52-55, 日本離島センター, 2005.
- 17) 大日本水産会:都市漁村交流活動の事例(10)沖縄県石垣市 サバニクルーズで漁業と海体験, 水産界, 1446, pp.41-44, 2005.
- 18) 山田理恵:地域開発からみた伝統的運動文化の意義:桑名の打毬戯の展開と現代における価値考察, 体育学研究, 60(2), pp.415-428, 2015.
- 19) 大谷尚:4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54(2), pp.27-44, 2007.
- 20) 山田理恵・森規昭:伝統綱引きの現代性:鳥取市気高町水尻における「因幡の菖蒲綱引き」に着目して, 体育学研究, 62(1), pp.83-104, 2017.
- 21) 山田理恵・渡辺融:薩摩・大隅地方におけるハマ投げ:姶良郡加治木町の場合を中心に, 体育学研究, 56(1), pp.47-60, 2011.

著者紹介

千足 耕一(正会員)

東京海洋大学学術研究院(東京都港区港南4-5-7), 1966年生まれ, 1992年筑波大学大学院体育研究科修了, 筑波大学体育センター勤務, 十文字学園女子短期大学, 鹿屋体育大学海洋スポーツセンターを経て, 2008年9月東京海洋大学助教授, 2016年2月同大学教授。医学博士上, 日本海洋人間学会理事, 日本野外教育学会理事。

E-mail:chiashi@chiashi.jp

蓬郷 尚代(正会員)

東京海洋大学海洋生命科学部博士研究員(東京都港区港南4-5-7), 1971年生まれ, 1998年日本女子体育大学大学院スポーツ科学研究科修了, 2015年3月東京海洋大学人学院海洋科学技術研究科修了。日本女子体育大学助手, 上智大学講師を経て, 2015年4月より現在東京海洋大学博士研究員。海洋科学博士上, 日本海洋人間学会理事, 日本野外教育学会会員。

E-mail:hisayo@tomago.jp

A case study of the contemporary significance of traditional wooden sailing boats

known as Hokake Sabani:

Qualitative analysis of a survey of Sabani Sailing and Paddling Race participants

Koichi CHIASHI and Hisayo TOMAGO

ABSTRACT : This case study sought to examine the contemporary significance of the traditional maritime cultural property constituted by the traditional wooden sailing boats known as Hokake Sabani. We conduct an online survey on impact of the Sabani Sailing and Paddling Race and of involvement with Sabani on event participants and the local community. Textual data obtained from an online survey of race participants was categorized according to area of residence (i.e., on Zamami Island, where the race is held; in Okinawa Prefecture; or outside Okinawa Prefecture) and then subjected to qualitative analysis using SCAT (Steps for Coding and Theorization). Descriptions of the expansion of personal connections, psychological effect brought on by the challenge of the race, and ripple effects due to continuation were common to all areas. Noteworthy responses from Zamami Island included enthusiastic efforts on the island and impact on junior high school students on Zamami Island. In addition to increased awareness from hosting the race, gratitude towards the race organizers, and links with daily activities, responses by residents of Okinawa Prefecture also described ripple effects on other regions and the possibility of applications beyond the race. Respondents living outside of Okinawa Prefecture expressed impacts on personal thoughts such as the expansion of their understanding of Okinawa and a desire to inherit traditions in Sabani as well as gratitude for being able to engage with Sabani, and described how their involvement with Sabani enriched their lives. These impacts affirm the contemporary significance of Hokake Sabani.

KEYWORDS : *sabani, traditional marine culture, contemporary significance , case study, qualitative analysis*